

パーソナルスペース試論

豊村 和 真

本論は、パーソナルスペースに関する考え方についての私見を述べることを目的とし、豊村(1996)を補足するものである。最初に、パーソナルスペースに関する従来の見解を、論を進めるのに必要な程度にごく簡略にまとめる。

パーソナルスペースとは

より進んだ定義は後に述べるとして、まずパーソナルスペース(Personal Space)とは、「他の人をあまりに近づけたくない、他の人にあまり近づきたくないと考え、それを実現する傾向」と定める。しかしながら過去の研究ではこの一見すると誤解の余地のない現象も多様に解釈されたようである。そこでまず従来の方考え方を示し、しかる後に試論を述べることにする。

パーソナルスペースの従来定義について

パーソナルスペースもしくはそれに類似する定義についてまず書く。以下豊村(1996)からの引用である。

パーソナルスペースは、Katz(1937)により「蝸牛の殻のようなもの」と、Uexkull(1957)により「人間が内側にはいつているしゃぼん玉のようなもの」と、比喩的な表現がなされていたが、Sommer(1959)により操作的に「個人が習慣的に他者との間にとる距離」と定義されるようになった。

なぜパーソナルスペースが存在するかということについては、身体緩衝帯(Body-Buffer Zone)という表現で、Horowitz(1964)が自己防衛、即ち、自己の身体の周囲に距離をおくことによって脅威的なものか

ら身を守るためであるとしている。他に、パーソナルスペースは比較行動学の『なわばり』に類似した性質を示すという研究(Dosey and Meisels (1969) など)が多いが、空間における固定性、境界の鮮明性、生じる反応の違いなど、異なる点も多い (Hayduk, 1983)。

以上豊村 (1996) からの引用である。この他にもいくつかの定義が存在するが、いずれにしても各種のパーソナルスペースの定義の前提として共通する重要な点は、パーソナルスペース内に侵入された時には生理的な不快感、気詰まり感を感じ、逃避等の否定的な反応が生じるということである (豊村, 1996)。

パーソナルスペースの研究法について

ここで、パーソナルスペースについてどのように研究されたのかを概観する。ここでも主として豊村 (1996) に従って分類する。

パーソナルスペースの研究方法は、必ずしも研究者間で合意されているわけではないが、大きく実験法、観察法、投影法の3つに分けられる。実験法は主としてストップディスタンス (Stop-distance) 法、観察法は日常生活状況を使用しつつ実験する観察実験法、投影法は現実実験するわけでなくモデルの人形等を使用し、自分に見立ててパーソナルスペースを求める方法である。

(1) 実験法

ストップディスタンス (Stop-distance) 法は、徐々に近づく実験者を被験者が (不快に感じるようになるため) 接近するのを止め、その時点での実験者と被験者の鼻と鼻の間の距離、爪先と爪先の間の距離等、二者間で (通常は) 最も近いところの距離を測定する方法である。逆に、被験者が実験者に接近し、不快に感じ始めたとき立ち止まる方法もある。また、実験の試行開始位置を変えて測定することができる。被験者を部屋のすみに立たせたり、壁の近くに立たせたり、接近する方向を変えるなどである。通常は被験者調整法的性質、すなわち接近者が停止した時、遠すぎるとか近すぎると被験者が感じるなら距離を再び調整させることが多い。

(2) 観察法

(a) 現場観察法

実験の意図を隠したまま、さりげなく近づいたり、離れたりして、パーソナルスペースに変化があるかどうかを観察する方法である。この手続きには、被験者をほとんど統制できないという短所がある。

(b) 座席選択法（座席配置法）

椅子と机しかない部屋で話をする時、被験者に椅子に座るように勧め、どの椅子に座るのかを調べる方法である。あるいは、被験者が椅子を好きなどころに動かして、実験者と向かい合って座らせるようにする方法である。この方法とパーソナルスペースの関係はそれほど明らかではない（安藤、1987）。

(3) 投影法

人の形をしたフェルト、シルエット、人形、人の絵等が描かれた紙を刺激として使ったり、相互作用場面を想定してある反応をするよう要求する方法である。

以上のような各種の手法があるが、これらの関係について検討した安藤（1987）によれば、投影法的手法と実験的手法、観察的手法と実験的手法の間には関連が乏しいという指摘がなされている。

従来の研究の総括

以上のように、通常もっとも良く使われ、おそらくは最も確実な結果が得られる方法はストップディスタンス法である。しかしながら、ストップディスタンス法においても相当の批判がある。被験者の属性による差（性差など）があるのかないのかはつきりせず、被験者を取り囲むパーソナルスペースの被験者周囲の形態についても一致した見解はえられていない。これらも豊村（1996）を参照されたい。また、安藤（1987）によれば、Monge and Kirste（1980）はこれまでの近接の測定方法が、心理学的あるいは機能的距離よりむしろ直線の物理的距離に基づいている、また、変化するものよりむしろ固定したものとして距離を測定していると述べているという。

ストップディスタンス法の改良

ストップディスタンス法は妥当性はともかくとして、同一条件における同一被験者に対して測定をする場合は、かなり安定した結果が得られ、客観性についても十分な指標である。そこで、もう少しストップディスタンス法の長所短所について考察してみよう。

除去できない環境からの影響

まず仮想的な例を出したい。まったく未知の人物に対してそれ相応の距離をおいた人でもその人が例えば配偶者の身内のものだと分かると近づいても気にならなくなるであろう。また、うす暗い所で人影をみたら安易に近づいたりはしないであろうが、その人が知り合いであるとか警察官であるなどとわかった拍子に逆に近寄るであろう。

すなわち、その対象（ヒト）に近づくことに対する総合的判断の結果としてある距離をとるのだということを示している。

この際、そのヒトの属性（性、人種、年齢など）がパーソナルスペースに対して重要な独立変数となっている。この点からの研究が多いことは Hayduk (1983) などの総説を参照されたい。

しかしながら、パーソナルスペースに影響を与える独立変数は、被験者の属性にとどまらず実に多数存在する。例えば、従来の定義では独立変数としてヒト以外のものは明示的に登場してなかったにも係わらず、空間の広さ（小西，1986）など色々な環境要因が独立変数と考えられた。

これは当然考慮されなければならない変数であるが、当然ながら、実験的手法を用いたとしても全ての関連する変数（壁の影響、周囲の明るさなど）を除去できるわけではない。何も無い空間では実験できないからである。それならば、そのような変数を除外するのではなく、どの条件でも当該の変数の影響が等質になるようにして、実質的にその影響を無視できるようにするという方向に持っていくべきである。

従って、先にあげた例では、未知の人の場合のパーソナルスペース（Uとする）と知り合いの場合のパーソナルスペース（Kとする）を別々に測定して、それらを絶対的な値とみなすのではなく、2つの値の差分（D

とする)をとり、 $D (=U - K)$ がその条件下で言える唯一の値とみなすのである。被験者の属性ごとに D を求め、それを比較することにより、パーソナルスペースの属性間の合理的な比較が可能になるのである。

実際には、このようなことを無意識的にせよ行った研究もあると思われるのであるが、上記のような差分ということを明瞭に意識していなかったため、単に各条件下での比較を行っていたようである。

相対的発想

以上のような考え方から、過去に行った研究例には、健常児について発達の壁の影響を測定した豊村(1994 a)や、同じく知的障害児と健常児の比較を行った豊村(1994 b)がある。

いずれも、壁から2 mの距離に実験者が座っていて、それにストップディスタンス法的に被験者を近づかせた結果得られた値を仮の原点として、壁から1 mの距離、壁際、角にそれぞれ実験者がいた場合に得られる値の相対値(上記の D 値)を比較したものであった。

これにより、部屋の構造や実験者の属性に左右されずに、各被験者の壁に対する影響を検討することができた。

新たなパーソナルスペース研究の視点

ここでは、別のパーソナルスペースの視点を導入する。それは、パーソナルスペースは、ストップディスタンス法によって測られるような、境界線のようなものではなく、空間内で連続的に変化するものであると考える視点である。さらに言えばストップディスタンス法には以下に述べるような、付随する(しかし重要な)問題点を持つと考えられるからである。

痛覚とパーソナルスペース内での不快感は似ている

その問題点とはこうである。パーソナルスペース侵入時の不快感が痛覚に似た性質であるように思われる。これは、現在のところ単なる仮説

であるが、充分考えられる仮説である。痛覚は、知能やパーソナリティに左右されやすいといわれ(笠原, 1997), 個人間変動は個人内変動より大きいというのが定説(吉田・加留部, 1969)である。パーソナルスペース侵入時の不快感も、ごくわずかの不快感で不快と言う被験者もいれば、相当我慢したのちに不快とする被験者もいるのではない。

この仮説が正しいとするとストップディスタンス法により得られた、被験者属性に関する結果が必ずしも同一にならないのは、被験者の不快と見なすその見なし方に相当の個人差があったからとも考えられるのである。

ストップディスタンス法によるパーソナルスペースは何を意味するか

もっと本質的に問題な点もある。他のヒトとある距離以下に接近すると不快だという判断はいったい何を意味するのか。その不快な距離より内側に入ってきた場合はどうなるのか。

通常の社会生活において、混雑する電車の中などパーソナルスペースに侵入される場合はいくらでもあるが、その度に逃走する(できる)わけでもない。従って不快ではあるが、ただ我慢しているだけという状況がたくさん発生している。そうなると、境界線(反応転換点)としてのパーソナルスペースは、確かに計測可能であるが意味が曖昧である。

閾値は反応転換点という過去の定義から、反応転換が50%の確率で生じる値という定義に変わっているが、閾値周辺では反応確率が連続的に変化していることを前提としているのである。パーソナルスペースも閾の一つであると考えれば、事情は同じである。

パーソナルスペースの新定義について

パーソナルスペースとは、「空間内の任意の位置における心理的緊張の程度を測定することができるが、(ヒトにおいては)他のヒトが存在し、その条件が変化する場合に発生する心理的緊張(不快感)の変化」をさす。

どのように測定するか

いったん上記のような定義を認めたとしても、どのようにして、心理的緊張の程度を測定するかが問題となる。さらにその測定手段がどの程度、信頼性が高いかが問題になる。まず考えられるのは、行為を中断することなく連続的に測定できる生理的指標を使用することである。他に考えられるのは、マグニチュード推定法的に、本人に心理的緊張の度合いを表現させるというものである。後者は、実験場面への適応可能性が非常に大きい、信頼性が不安である。前者は信頼性はある程度期待できるが、実験場面への適用可能性が乏しい。移動する被験者から生理的指標を得るのは容易ではない。

そこで後者を用いて現在までにいくつか研究を行った（豊村, 1995 a；豊村, 1995 b；都築・豊村, 1995；豊村・都築, 1995 など）。まず、直接心理的緊張の度合いを数値化させた値と握力計を用いて心理的緊張の度合いを握力の強さで表現させた値を比較し（豊村, 1995 a）、次に児童について心理的緊張の度合いを円の大きさに表現させた値との比較（豊村, 1995 b）を行った。これらの変数間には有意である程度大きな相関（0.4～0.7）が見られたので、以後は数値を言わせる方法のみで実施した（都築・豊村, 1995；豊村・都築, 1995）。

マグニチュード推定法的に数値を言わせる方法の信頼性は、現在のところ再検査信頼性的にしか検討していないが、相当安定した結果が得られている。とはいえ、引き続き、測定手段の信頼性については検討する必要があるであろうし、また、定義に含めておいた測定可能性自体についても検討する必要がある。

再度相対的発想

最後に、本手法でも相対的な比較しかしない（できない）ということ強調しておきたい。あくまで、ある条件（ある位置）での値と比較して、別の条件（別の位置）での値が相対的にどの程度上下しているかどうかの程度（ストップディスタンスの項で述べたD値に相当する）を、それとは別の条件（属性）間で比較するということである。マグニチャー

ド推定法は本人にとっての絶対値を直接聞く方法であるが、その値の使用方法はあくまで相対的なのである。

比喩的に述べてみると、海岸に立ち、岩場に波打つありさまを観察するときには、海の深さはあまり問題にする必要はない。

同様に、ある場面でヒトが存在するために心乱れる様子を観察するには、その乱れの絶対的な値ではなく、相対的な値を知れば充分なのである。

[引用文献]

- 安藤孝敏(1987):「個人空間—概念と測定方法—」, 早稲田大学大学院文学研究科 文学研究科紀要, 14: 39-47
- Dosey, M. & Meisels, M. (1969): Personal Space and self protection. *Journal of Personality and Social Psychology*, 11: 93-97
- Hayduk, L. A. (1983): Personal space: Where we now stand. *Psychological Bulletin*, 94: 293-335
- Horowitz, M. J., Duff, D. F. and Stratton, L. O. (1964): Body-buffer zone. *Arch. Gen. Psychiat*, 11, 651-656
- 笠原洋勇 (1997):「老年期の心理的問題」, 福祉士養成講座編集委員会(編), “老人・障害者の心理” 第2章, 中央法規, 68-103
- Katz (1937): *Animal and men*. Longmans, Green.
- 小西啓史(1986):「空間の大きさが対人距離に及ぼす効果について」, 武蔵野女子大学紀要, 21: 149-154
- Sommer (1959): *Studies in personal space*. *Sociometry*, Vol. 22, 247-260
- 豊村和真 (1994 a):「パーソナルスペースに関する発達の研究—物理的環境条件の検討—」, 日本教育心理学会 第 36 回大会発表論文集, 34
- 豊村和真 (1994 b):「知能障害児のパーソナルスペースに関する研究(7)—物理的環境条件の検討—」, 日本特殊教育学会第 32 回大会発表論文集, 256-257
- 豊村和真 (1995 a):「パーソナルスペースに関する基礎研究(2)—マグニチュード推定法による検討—」, 日本心理学会第 59 回大会発表論文集, 634
- 豊村和真 (1995 b):「パーソナルスペースに関する発達の研究(2)—小学生を対象としたマグニチュード推定法による検討—」, 日本教育心理学会第 37 回大会発表論文集, 376

- 豊村和真・都築道子 (1995) : 「Personal Space に関する基礎研究(4)」, 日本応用心理学会第 62 回大会発表論文集, 64
- 都築道子・豊村和真 (1995) : 「Personal Space に関する基礎研究(3)」, 日本応用心理学会第 62 回大会発表論文集, 63
- 豊村和真 (1996) : 「知的障害者とのコミュニケーション：空間行動」, 永田勝彦 (監修), “福祉社会の展開と課題” 第 13 章, 北大路書房, 193-205
- Uexkull, Von J. (1957): A stroll through the worlds of animals and man, in instinctive behavior, claude shiller, ed. New York: International Universitiers Press.
- 吉田正昭・加留部清 (1969) : 「皮膚感覚・自己受容感覚」, 和田・大山・今井 (編), “感覚知覚ハンドブック” 第 7 章, 誠信書房, 778-819